

## 日本分類学会連合ニュースレター

News Letter published by the Union of  
Japanese Societies for Systematic Biology

Nos 13-14 [2008年11月18日]

## 新連載「連合加盟学会のトピックス」

日本蜘蛛学会の最近の活動  
鶴崎展巨（日本蜘蛛学会）

日本蜘蛛学会は、1936年創立のクモガタ類と多足類の専門学会である。会員数約300と小規模だが、国外会員が約1割を占め、年2回発行の会誌 *Acta Arachnologica* の掲載論文も約30%が国外からの投稿と、国際化の度合いはかなり高い。いっぽう、アマチュア会員の比率の高さでも、本学会は分類学会連合加盟学会の中で最上位群に入ると想像される。学生・院生を含め大学等の研究機関に在籍する研究者とそれらに属さない研究・同好者間で会誌や学会への期待像がすべてで一致するとはかぎらず、両者がともに満足できる環境を整えることが本学会の重要課題の一つである。

さて、本会の活動についてはすでに前会長の吉田真氏らによりすでに本誌(2003, No. 3, p. 1)に紹介されているので、ここではその後の学会の活動を、とくに若手研究者や地方のクモ研究・同好者への研究支援にかかわるものを中心にいくつか紹介したい。

まず、分類や分布に関する研究や調査では文献調査が非常に重要である。最近では電子ジャーナル化の進展で主要科学雑誌に掲載された論文は入手しやすくなってきた。*Acta Arachnologica* 誌も数年前から科学技術振興機構の J-Stage に参加し、最新号はもとより、現時点(2008年11月)で1972年のVol. 24まで遡って掲載論文をPDFファイルで取れるようになった。しかし、このような雑誌はまだ一部であり、古い文献や地方出版物の文献の入手は、誰にも容易ではない。本会は会員に学会図書への貸し出しサービスを古くから提供しているが、所蔵文献リストが、図書幹事の加村隆英氏らの骨折りにより2007年に電子ファイルで公開され、検索が容易になった。多足類については故三好保徳・故高桑良興両博士が集めた文献を私のもとで管理しているので必要な方には利用いただける(請求によりリストのPDFファイル送付可能)。

また、真正クモについては、種の同定や、地域ごとの種リスト作成に向けたサービスが、数人のベテラン会員により提供されている。一つは、谷川明男氏が2000年以降継続的に作成し、PDFファイルとしてWeb上で公開している日本産のクモの種リストである(最新バージョンはVer. 2008R1)。クモでは国内だけでも毎年、新種や日本新記録種が出ており、学名変更や属や科の所属変更も珍しくない。国内既知種が1500に達するクモでそれらを逐一把握するのは至難である。地域別のクモのリスト作成時にこのリストを利用すれば入力の手間が省けるうえに、最新の学名で表示できる。また、こちらは有料だが、クモの県別の分布データもCDで提供されている(新海ら2006)。これを使うと各種がどの都道府県で記録されているか地図上で一目瞭然で、県ごとの関連文献もわかる。地方出版の文献や記録をす

べてカバーしているわけではないが、利用価値はきわめて高い。自分が住む地域にどの種が記録されているかを知ることは分類研究の入口として重要である。じつは私も、中学生の頃、愛媛県のクモの目録作成をめざし、採集のたびに県新記録となるクモが次々と見つかる楽しさから、これらの動物群に没入した一人である。

クモの同定については、非常に有用だった千国図鑑(1989)が久しく絶版で、これからクモ分類を勉強しようという人には不便が続いていたが、幸い、今夏、改訂版が出た(千国2008)。また、ヒメグモ科やコガネグモ科・アシナガグモ科についてはモノグラフや平易な同定の手引き書(吉田2003, 谷川2007)が、本学会の出版物として刊行され、販売されているので利用いただきたい。なお、何年も前に企画されながら、なかなか進捗していなかった日本産全種のクモ図鑑の出版計画が再始動中と聞く。早期の出版が待ち望まれる。

さて、最初に述べた学会の課題だが、毎年8月下旬に開催される大会では、最近では学部や大学院に在籍する若手研究者の発表がとみに増え、発表内容も高度化傾向である。しかし、アットホームな雰囲気は維持されており、この課題は現状ではまずまずクリアされていると思う。本年は記念の第40回大会が、大会本部が置かれている追手門学院大学の加村氏のお世話により大阪の追手門学院大阪城スクエアで8月23~24日に開催され、盛況だった。

文献(千国図鑑以外の購入方法についてはHPで調べるか、私までおたずね下さい)

千国安之輔(2008)写真日本クモ類大図鑑。改訂版。偕成社(東京)309pp. 価格: 31,500円。

新海 明・安藤昭久・谷川明男(2006)県別クモ類分布図 ver. 2006, CD-ROM 価格: 8,140円。

谷川明男(2007)日本産コガネグモ科ジョロウグモ科アシナガグモ科のクモ類の同定の手引き。日本蜘蛛学会, 121pp. 価格: 4,000円。

吉田 哉(2003)日本産ヒメグモ科総説。日本蜘蛛学会, 223pp. 価格: 4,000円。

「魚類の系統と多様性に関する  
国際シンポジウム」開催  
松浦啓一(日本魚類学会)

表記の国際シンポジウムが2008年3月3~4日に日本魚類学会と国立科学博物館の共催によって実施された。本シンポジウムは国立科学博物館の開館130周年記念事業の一環として開催され、シンポジウムの内容と組織を魚類学会が担当し、経費及び実務と会場設営を国立科学博物館が担当した。この国際シンポジウムには国内外から122名が参加した。招待講演者23名(海外から16名、国内7名)が16題の口頭発表を行い、一般参加者(92名)が46題のポスター発表を行った。本シンポジウムでは魚類の中でも多様性が高いハゼ類

を扱った研究発表が5題あり、そのセッションには天皇陛下が出席された。また、シンポジウム直後の3月5日と6日に葛西水族園と築地魚市場へのエクスカージョンを行い、招待講演者と同伴者が参加した。招待講演者の多くはシンポジウム終了後も東京に滞在し、国立科学博物館や東京周辺の自然史系博物館において魚類標本の調査や研究交流を行った。

招待講演は「生物地理に関するセッション」、「多様性と分類に関するセッション」、「進化と系統に関するセッション」及び「系統関係と個体発生に関するセッション」に分かれ、この分野の最新の成果がアメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ及び日本の研究者によって発表された。今回のシンポジウムでは比較形態学に関する発表や分類学に関する発表が行われる一方で、分子生物学的手法を用いた系統研究やエボ・デボ的な手法を魚類形態学に導入した研究、そしてデータベース解析を生物地理に導入した研究など、近年の研究動向を反映した発表も多数見られた。参加者にはベテラン会員の顔もあったが、若手会員が多数を占め、外国の招待講演者と交流を深めていた姿が印象的であった。このような国際シンポジウムに若手会員が参加し、国外の研究者と交流を深めることは日本の魚類学を発展させる契機となる。

日本魚類学会は1985年に魚類に関する国内初の国際シンポジウム「Second Indo-Pacific Fish Conference」を国立科学博物館で開催し、200名を超える研究者が参加した。Indo-Pacific Fish Conferenceは国外の多数の研究者と国内の研究者が交流する初めての機会であった。そして、日本の若手研究者は研究上の刺激を大いに受け、その後、日本の魚類学は大いに発展することとなった。Indo-Pacific Fish Conferenceは4年に1度開催されているが、第2回東京(1985年)の後、第3回ウェリントン(ニュージーランド:1989年)、第4回バンコク(タイ:1993年)、第5回ヌメア(ニューカレドニア:1997年)、第6回ダーバン(南アフリカ:2001年)、第7回台北(台湾:2005年)と回を重ねるにつれ、日本の研究者の参加数が増えており、50人以上の日本人が参加することも珍しくない。第9回はオーストラリア西部のパースで2009年6月上旬に開催される予定であり、日本から多くの研究者が参加するであろう。

また、海外の魚類研究者は日本魚類学会の活動に注目しており、英文学会誌Ichthyological Researchには外国人研究者の論文が数多く掲載されている。現在、世界で魚類学専門の学会誌を発行しているのは日本とフランスのみである。また、他の動物群でも言われていることであるが、生物多様性の重要性が喧伝される一方で分類学関係の研究や論文数が世界的に減少する傾向にある。しかし、日本魚類学会は依然として分類学の旗を高く掲げ、国外の研究者から「日本の魚類学は健全である」という評価を受けている。

\*\*\*\*\*

## 日本分類学会連合第7回シンポジウム

日本分類学会連合第7回シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類—発生から分子へ」が以下の要領で開催されました。プログラムと講演要旨を掲載いたします。

日時: 2008年1月12日(土)13:30~17:30  
場所: 国立科学博物館新宿分館

主催: 日本分類学会連合  
共催: 国立科学博物館  
協賛: サイエンス・アイ、全国農村教育協会、東海大出版会、6地区コンベンション関連団体事務局

## プログラム

- 13:30~13:40 松井正文(京都大学)  
「連合代表挨拶」
- 13:40~14:15 和田 洋(筑波大学)  
「エボデボから見た後口動物の系統」
- 14:15~14:50 倉谷 滋(理化学研究所)  
「反復説再考」
- 14:50~15:25 白山義久(京都大学)  
「無脊椎動物の系統と分類—最近の話題」
- 15:25~15:50 休憩
- 15:50~16:25 西川輝昭(名古屋大学)  
「脊椎動物の起源を探る—脊椎動物の最も新しい共通祖先はホヤかナメジウオか?」
- 16:25~17:00 馬渡峻輔(北海道大学)  
伊藤 希(筑波大学)  
「系統ってなに?」
- 17:00~17:30 全体的な質疑応答

## 連合代表就任ご挨拶とシンポジウム主旨について

松井正文(京都大学 人間・環境学研究科)

植物のあとは動物というだけの理由から、原前会長の後を継いで2008~2009年度の会長の任を仰せつかりました。右も左も分からない状態ですが、何とか任期を乗り切らねばと思っていますので、ご協力を宜しくお願いします。

私事で恐縮ですが、私の専門は両生類の系統分類学です。系統学と分類学はまったく別個のものという大家もおられますし、体系学という名前の好きな方もおられますが、要はカエルやサンショウウオをいかに、進化の流れに沿って分類すべきか、という問題に無い知恵を絞っています。

この分野でDNAなどの分子解析をし、分子系統樹を得て分類の基盤とするのは、もはや常識になってしまったのですが、同時に多くの問題も出ています。主にミトコンドリアDNAの部分配列にのみ基づく分子系統樹が、生物そのものの真の系統樹を反映しているのか疑問です。独自のクレードを単純に独立タクソンとしたがる傾向は危険です。また、分子系統樹の上で行動や習性の進化を無批判に論じることでも問題ではないでしょうか。

まして、形態学的知見との不一致があるとき、すぐに形態の類似を収斂に結びつけて分子の優位性を語るのには、伝統的な形態解析は古くて信用ならん、と言っているようです。そこで形態の多様性を生じさせる発生機構が知りたくなるわけです。収斂が原因で見かけの同じタクサが頻出するのは本当か、そうだとすればそれは分子レベルでの発生機構で説明できるのか。我々古い頭をもった人間は、そうした疑問が解決されなければ、分子系統樹になかなか納得がいかないのです。

動物の比較形態の問題は、別の側面からも分かりやすい説明を必要としています。初等中等教育の現場では、古典的な形態進化の問題が、いまどうなっているのか、最新の情報を知りたいという要望が多いという

ことで前会長が提案されたのが今回の企画です。しかし、植物界と違って動物界ではいまや、比較形態学者の興味の中心は非常に細かい方向に動いており、マクロの形態そのものの研究者は極めて少ないようです。

今日はそうした中で、ヘッケルの反復説の今日的理解に始まり、脊椎動物の起源の話題をも含む事項について、その道の専門家に分かりやすく解説して頂きます。発生学、分子生物学、比較形態学、系統学、分類学を結ぶ今回の講演は、分類学の根幹に関わる大きな諸問題を見直し、理解を深める良い機会になってくれると考えます。

## エボデボから見た後口動物の系統

和田 洋 (筑波大学)

20世紀の終わり、動物学の中で進化発生学エボデボ (Evo-devo: Evolution and Development) と呼ばれる分野ができた。もちろん、それ以前にも形態学の分野で発生学が果たしてきた役割は小さくなかった。しかし、このエボデボという学問は、形態形成に関わる遺伝子の情報を取り入れたという点で、それまでの形態学と発生学のつながりと決定的に異なっていた。アカデミー論争の中でキュビエが主張したように、多細胞動物の体制には、埋めがたい溝がある。たとえば、棘皮動物と脊椎動物の体制をどのように比較してよいかという問題は未だに解決していない。したがって、多細胞動物の高次分類は、原口の運命など発生初期に現れるごく限られた形質に基づかざるを得なかった。ところが、エボデボは、多細胞動物の形態が、共通の遺伝子セットを使うことによって作り出されているという明確なメッセージを発信した。多細胞動物の形態に横たわる溝を、形態形成に関わる遺伝子を橋渡しとすることで理解できるのではないかと期待された。

そのような背景のもとに、後口動物の系統で起こった体制の進化を見ていく。後口動物の祖先の姿は現生の動物では、ギボシムシに最もよく似ていたであろうと想像される。エボデボは、その祖先が背腹を逆転させたことで、オタマジャクシ型の体制をもつ脊索動物の祖先が産まれたであろうと説く。ただ、そのとき、脊索や中枢神経のパターンニングがどこに起源しているのかについては、全く未解明である。形態形成に関わる遺伝子の情報をもってしても埋められない溝が未だある。

エボデボの説く、動物の多様な形態は共通の遺伝子によって生み出されるというメッセージは、逆に、共通の遺伝子からどうやって異なる形態を生み出すのかという問題を提起する。その問題にエボデボは、遺伝子の使い方、発現の様式が異なるからだという答えを用意している。遺伝子セットは同じでも、発現を制御するシス制御領域が異なるため、最終産物である形態が大きく異なる。しかし、果たしてそれだけで十分だろうか？ 動物は進化の過程で様々な新規形質を生み出してきた。後口動物でも、脊索動物の祖先が獲得した脊索、脊椎動物の祖先が獲得した軟骨や硬骨は、それ以前の動物にはなかった形質である。我々の研究から、このような新規形質の進化には、ドメインシャッフリングを介した新規遺伝子の創生も重要な役割を果たしてきたことがわかってきた。エボデボが説いてきたように、転写因子やシグナル分子という形態形成を司る遺伝子のおおくは多細胞動物で共有されている。しかし、細胞外に分泌されて軟骨のマトリックスタン

パク質となるものなどは、ドメインシャッフリングを介した新規遺伝子にコードされているものもあることがわかってきた。上述の脊索の起源にもドメインシャッフリングによる新規遺伝子の形成が関わっていることを示唆する結果も得られている。

## 反復説再考

倉谷 滋

(理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター)

個体発生と系統発生という、ともに時間軸に沿って複雑高度化する二つの現象の間に平行関係を認める考えを広く反復説と呼ぶ。発生学的研究を通じて、進化のシナリオとメカニズムを研究しようというエヴォデヴォの立場からすれば、この反復説の現代的意義を問い直さないわけにはゆかない。

ここで問題とされる反復説とは、フォン・ベアー (1828) によりその枠組みが作られた原型論的生物発生法則をもとに、ダーウィンの「種の起源」の洗礼を受けることによってあらためて理論化されたヘッケル (1866) による反復説と、その亜流と目される一連のドグマを指す (ド・ビアやゼヴェルツォッフの説に代表される、もっぱらヘテロクロニーの分類や形式化によって案出された数々の学説がここには含まれる)。これらすべては、系統分岐過程と発生の道筋が基本的にはパラレルであることをなかば理想化された状態として認め、それはまたヘニック以来の分岐系統学にも、形態的形質ならびに遺伝子の類似性、あるいはその相同性、さらに発生過程における細胞系譜や胚葉の意味の扱いに関して大きな影響を与え続けている。

今回は、反復する例として考えることのできるいくつかの事例を確認し、そのような発生過程やパターンをもたらすに至った進化機構について考察する。ひとつは、脊椎動物におけるファイロタイプとして認識されている咽頭胚のかたちが、門や亜門という規模において、一種の安定化を通して保存されなければならない経緯を説明し、発生拘束と呼ばれる進化のバイアスとの関係を模索する。続いて、多くの細胞系譜と、それらが特定の時間、空間において一定のやり方で相互作用することによって作られる胸腺の発生を例として取り上げ、なぜ特定の器官の発生が、それに先だって祖先的な状態を経なければならないのか、リードルによる概念、発生負荷を用いて説明を試みる。

上の考察より、反復的発生過程が、動物の個体発生のうちファイロタイプ以降の発生プロセスに頻出すること、また、ファイロタイプを持つほどの大規模なボディプラン獲得のための進化過程を十分に経てきている動物群にのみそれが現れることが予想される。反復的発生過程は、進化によって二次的に獲得されたものであり、決して個体発生過程が進化過程を反復するように即目的にできあがっているのではない。このように考えると、ヘッケルの「個体発生は系統発生をくり返す」も、それに対するアンチテーゼとしてしか意味を持ち得ないガースタングの「個体発生が系統発生を作る」も妥当ではなく、「個体発生は進化によって作られる」が最もふさわしい。

## 無脊椎動物の系統と分類—最近の話題

白山義久 (京都大学瀬戸臨海実験所)

無脊椎動物の系統と分類に関する知見は、いわゆる新ヘッケル学派の2分岐説から大幅に変わりつつある。高次分類群の系統に関する理解は一時の非単系統群の分割(例:袋形動物)による多数の動物門の並列的な羅列の時代を経て、分子生物学の発展とともに、前口動物内の脱皮動物と冠輪動物という2大系統の存在の確認にいたり、現在はさらにいくつかの動物門において再編が進みつつある。かつて独立の動物門として扱われていた有鬚動物・ゆむし動物は環形動物の内群であるとされた。また動物界ではなく原生動物界の中の1門とされていたミクソゾアは、今や刺胞動物の内群と扱われている。しかし時には分子生物学のデータが、とんでもない指摘をする場合もある。珍渦虫の系統上の位置についてのかつての分子生物学のデータは、餌の遺伝子を増幅して得ていたものであることが明らかになり、試料の慎重な取り扱いの必要性を強く示唆している。希少な生物ではこの問題は特に重要である。胴甲動物の系統について、近年分子生物学的データに基づいて議論が行われつつあるが、複数の論文の結論は必ずしも一致していない。

形態上の知見からも、動物門の統合の議論は活発に行われている。Micrognathozoaの発見とともに、あごをもつ多数の動物門について、単系統性を強く意識した考えが支持を受けている。また、神経系の構造の相同性ないしは吻の構造と機能に基づく脱皮動物の系統の見直しも進みつつある。これらの系統の見直しは多くの場合新たな分類群の発見がきっかけとなっている。現在も続々とあらたな分類群が発見されていることを考慮すると、無脊椎動物の系統に関する知見はまだまだ変化していくだろう。

新たな分類群の発見は、フィールドワークの成果以外のなものでもない。発見の大部分は海域からのものだ。近年の生物採集技術の進歩が、系統分類学の進歩を支えている。しかし、まだまだ調査は全体のごく一部であることもわれわれは意識する必要がある。新分類群の発見のペースは、この半世紀ほとんど変化がない。今後も膨大なアルファ分類の必要がある。

生物のインベントリーの努力は生物多様性条約の発効とともに各国の責務となっている。情報(いわゆるデータベース)技術の進歩によって、文献上とはいえ完全にその作業が終わった国もあるが、残念ながらわが国ではその努力は十分とはいえない。さらに分子生物学と情報科学とが連携して、行うべき膨大なインベントリーをより効率的に進めようという世界的な活動が始まりつつある。分類学会連合はその活動を遂行することのできる唯一の受け皿であり、また連合の使命でもあるといえるだろう。

脊椎動物の起源を探る  
一脊椎動物の最も新しい共通祖先は  
ホヤかナメクジウオか?—

西川輝昭 (名古屋大学博物館)

我々ヒトが自分自身のルーツを辿って行き着くのは、自らもその一員である脊椎動物の起源の問題である。ダーウィンの進化論が広く認められて以来、この問題は多数の動物学者の興味を引き、様々な仮説が提示さ

れてきた。その歴史を概観するだけでも大部の書物が必要となるはずであり、ヒトの思考(試行でもあり嗜好でもある)が、どれほど多様性に富んでいるかをつくづくと思ひ知らされて、楽しい気分になることができる。そこで、最初にその一端を紹介したい。

ついで、現代生物学の到達点に立って、「脊椎動物の姉妹群は何か」の問題を取り上げたい。従来、その答えとして、頭索類(ナメクジウオ)がもっとも普通に挙げられており、[脊椎動物+頭索類]と尾索類(=被囊類、ホヤなど)が姉妹群をなす、というのが伝統的な考え方であった。近年興隆著しい分子系統学もこれを支持して来た。他方、化石棘皮動物を用いて進化経路を復元した結果により、脊椎動物の姉妹群を尾索類とする説も根強い支持を受けてきたが、多くのたんぱく質のアミノ酸配列データを用いた最近の解析結果でもこれが認められている。さらに、多数の核遺伝子の塩基配列データを用いた最近の研究でも、脊椎動物の姉妹群を尾索類とする樹形が支持されたばかりか、頭索類は棘皮動物と姉妹群をなすという驚くべき結果が得られている(もしもこれが正しければ、従来の意味での脊索動物(=尾索類+頭索類+尾索類)は単系統群ではなく、後口動物(=脊索動物+半索動物+棘皮動物)の系統論は新展開を余儀なくされるだろう)。どうやら、脊椎動物の姉妹群は尾索類と考えるのが現代風らしい。さらに、尾索類のなかで最も早く枝分かれしたのは終生浮遊性の尾虫類(オタマボヤなど)であることが、分子系統学によって近年繰り返し主張されている。

このような樹形に基づくと、形態変化についてどのようなストーリーが描けるのか、また、その欠点はなにかを考察してみたい。

なお、最近の分子系統学によると、ホヤ類(現行分類体系ではホヤ(海鞘)綱、変態後は固着生活を送る)は単系統群ではなく、ホヤ類の一部は終生浮遊性のタリア類(タリア綱、ウミタル・サルパ・ヒカリボヤから成る)と姉妹群をなすという樹形が、複数の研究結果により支持されている。形態のギャップ(いわゆるボディープラン論)に基づく伝統的な高次分類体系は揺るいでおり、脊索動物においても、系統進化と形態変化との関係が改めて問われている。こうした点にも触れたい。

## 系統ってなに?

馬渡峻輔 (北海道大学)・伊藤 希 (筑波大学)

「進化はたったひとつの現象だから進化に即した分類はひとつしかない、それが自然分類だ」と分類学者は信じて仕事をしてきた。しかし、最近では分類学と系統学は全く異なった学問であるとの理解が広まってきた。そこで、系統学と分類学の関係を考えてみよう。

自然科学とはいわゆる素朴存在論を下敷きにしており、実証主義に基づく学問である。つまり、自然科学は物証に基づかなければならない。生物学の物証のひとつは「個体」である。個体の存在は誰も否定できない。

一方、生物は時間と切り離せない存在である。すなわち生物は時間軸にそって変化する。必ず変化するものであるなら、そこで何かを言うなら、同一性 identity を担保しなければならぬ。同一性とは、「私は私である」ということである。つまり、世界の存在を前提とすることなしに、まずは自分が存在できる。その次に

他者との関係が出てくる、つまり主体があるから他者ができ、世界が存在することになる。これを実証的に考えてみる。たとえば両親生殖の場合、親と子は異なる場所に同時存在し、したがって親と子は同一ではあり得ず、他者といえる。しかし、異なる時刻の存在が知られている対象の場合はややこしい。生物は時間によって変化するため、時間をへて存在する対象が同じであることを確認することは難しい。逆に言えば、時間をへて存在する対象が同一対象であることが確認されなければ、すなわち同一性が担保されていないければ、時間によって変化したかどうかはわからない。

実証的な意味で、系統の元は個体連鎖である。系統を考えると、時空連続体が想定されている。連続している対象を分類するにはどこかで切らなければならない。切る部位は分岐点である。したがって、系統に基づく分類とは分岐に基づく分類である。分岐を実証的に個体で考えると、1対の親から複数の子が生まれることである。このとき個体の数が増える。この現象は時間軸が短いので記録できる。もしこの記録を十分に長い期間蓄積したら、分岐が見えてくるのだろうか？進化において分岐が起こるとすれば、分岐したのは何か？形質の分岐は把握できる。でも分岐したのは形質ではない。プロセスとしての進化を想定すると、分岐を記述するためには分岐する「モノ」の同一性が必須である。自然に生えている樹木の枝分かかれ、つまり分岐は実証できる。見ればわかる。もとの枝と分岐後の枝が同時存在しているからである。では、時間をへた個体の集まりである系統とその分岐はどのように実証できるのだろうか？

ここから先は講演を聞いてください。今、要旨を書いている段階では講演者はまだこの先を考えていません。あしからず。

\*\*\*\*\*

**日本分類学会連合第8回シンポジウム**

日本分類学会連合第8回公開シンポジウム「分類学におけるDNA情報の活用」が以下の要領で開催されます。加盟学会会員の皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2009年1月10日(土) 13:30~17:30  
場所：国立科学博物館新宿分館

**プログラム**

- はじめに (趣旨説明：伊藤元己)  
宮正樹 (千葉県立中央博物館)
- 「ミトコンドリアゲノム全長配列を用いた  
魚類の大系統解析と分類への応用」  
村上哲明 (首都大学東京)
- 「DNA塩基配列情報を活用した生物学的種の認識  
～シダとキノコを例にあげて」  
吉武啓 (農業環境研究所)
- 「分類学におけるDNAバーコードの利用法」  
神保宇嗣 (東京大学大学院総合文化研究科)
- 「分類学における情報基盤システム」  
\*\*\*\*\*

**国際動物命名規約修正案  
～ご案内ならびにご意見の呼びかけ～**

マーク・J・グライガー  
(動物命名法国際審議会委員・琵琶湖博物館)

新学名と命名法的行為の電子出版が一定の条件下で認められるような、国際動物命名規約の大幅な修正が提案されています。お手数ではございますが、是非とも修正案をダウンロードし、注意深くお読みください。修正案は『Zootaxa』誌1908巻57-67頁で公開されており、同誌ウェブサイト <http://www.mapress.com/zootaxa/2008/f/zt01908p067.pdf> から無料でダウンロードできます。2008年12月発行予定の『Bulletin of Zoological Nomenclature』誌第65巻4号など、他誌からの公表も予定されています。動物命名法国際審議会のウェブサイト [http://www.iczn.org/electronic\\_publication.html](http://www.iczn.org/electronic_publication.html) では、PDFファイルのダウンロードサイトへのリンクもある解説文を掲載しています。審議会事務局では2009年10月17日まで、皆様のご意見をお待ちしております。その後、修正案の最終稿が作成され、審議会委員による票決が行われる予定です。

ところで、仮にこの修正案が採択された場合、現行の国際命名規約第4版日本語版を追補するための「公式」日本語訳を準備する必要がありますでしょう。

ご意見の宛先：  
Ellinor Michel 博士  
動物命名法国際審議会事務局長  
英国ロンドン SW7 5BD クロムウェル通り  
自然史博物館 気付  
Eメール：iczn-em@nhm.ac.uk

ご協力に感謝申し上げます。  
マーク・J・グライガー

【訳】 柁原 宏  
\*\*\*\*\*

**日本分類学会連合の活動報告**

2008年1月以降の連合の活動をご報告いたします。

2008年1月12日  
第7回総会を開催 (国立科学博物館分館)  
第7回公開シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類—発生から分子へ」を開催 (国立科学博物館分館)

2008年4月10日  
第19回役員会を開催 (国立科学博物館分館)

2008年4月21日  
大阪府知事、大阪府教育長、大阪府議会議長に「橋下大阪府知事の文化施設廃止計画に対する要望書」を提出

2008年9月20日  
一般公開講演会「最近の植物科学の進展：植物とは？あらためて考えてみよう」を、日本植物学会、日本生物教育学会と共同で開催 (東北大学 片平さくらホール)

**TAXA — 生物分類学メーリングリスト**

日本分類学会連合が運営するメーリングリスト (TAXA) は、生物分類学に関する情報交換や討論をするためのメーリングリストで、生物分類学に関心をも

つすべての方に開放されています。〈TAXA〉メーリングリストは下記の趣旨により開設されました:

日本分類学会連合は、「生物の分類学全般にかかわる研究および教育を推進し、我が国におけるこの分野の普及と発展に寄与することを目的(規約第2条)」として、2002年1月12日に設立されました。現在、分類学に関係の深い27の学会が加盟しています。その後、本連合はこの目的に向かって様々な活動を展開してきましたが、このたび新たな事業として「メーリングリスト〈TAXA〉」を開設することになりました。このリストの趣旨は、本連合からの広報のほかに、登録会員が互いに分類学に関する情報交換や討論をするための場を提供することにあります。したがって、このリストは本連合の加盟学会の会員ばかりでなく、分類学に関心をもつすべての方に開放されます。なお、リストへの登録など管理、運営は本連合の担当者が行いますが、投稿は登録会員なら誰でも自由に行えます。多くの方が登録くださいますようご案内申し上げます。

2003年12月21日  
日本分類学会連合  
代表:加藤雅啓

〈TAXA〉は2003年12月13日に開設され、2003年12月24日午後5時に稼働開始しました。2008年11月10日の時点で【862】名の会員が登録されています。入会を希望される方は、

- 1) メールアドレス
- 2) 氏名(日本語表記ならびにローマ字表記)
- 3) 所属

を明記の上、〈TAXA〉運営担当の三中信宏(taxa-admin@ml.affrc.go.jp)までご連絡ください。

\*\*\*\*\*

#### [編集後記]

13-14 合併号とさせていただきます今回のニュースレターをやっと発行することができました。これも加盟学会会員の皆様のご協力あったればこそでございます。特に、新連載の「連合加盟学会のトピックス」にご投稿をいただきました日本蜘蛛学会の鶴崎展巨先生と日本魚類学会の松浦啓一先生にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

分類連合ニュースレターでは随時加盟学会員の皆様から広くご寄稿を募集しております。原稿は柘原宛(kazi@mail.sci.hokudai.ac.jp)に電子メールでお送りください。電子メールが使用できない場合はFAX(011-746-0862)もしくは郵送(〒060-0810 北海道大学大学院理学院自然史科学分野)でお送りいただいてもかまいません。皆様からの多数のご寄稿をお待ち申し上げます。

(ニュースレター編集担当:柘原 宏)

\*\*\*\*\*

日本分類学会連合ニュースレター 第13-14号

2008年11月18日発行

発行者 日本分類学会連合

事務局 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館

編集者 柘原 宏

\*\*\*\*\*